

東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻訳と翻案  
-小説の翻訳を中心に-  
The translation and adaptation of *Dora Thorne* in East Asia:  
A study of the novel version

郷 波  
復旦大学外文学院

要旨

バーザ・M・クレーの『ドラ・ソーン』は近代東アジアで広く受容されたメロドラマである。日本では末松謙澄訳『谷間の姫百合』と菊池幽芳訳『乳姉妹』が出版され、家庭小説の流行に影響を及ぼした。中国では日本語訳を経由して、『ドラ・ソーン』はメディア・ミックスの形で受容されていた。本稿では先行研究によって指摘された情報を再検討し、小説の翻訳を中心に『ドラ・ソーン』の中国での受容を実証し、関連情報を分析してみたい。中国における翻訳を考察すると、3種類の訳本は『ドラ・ソーン』の日本語訳『乳姉妹』と関わっていることが明らかになった。『一束縁』は『乳姉妹』からの翻案作であり、韻琴女士の『乳姉妹』は菊池幽芳の作品を忠実に訳した作品である。さらに『ドラ・ソーン』をリライトした『紅涙影』は『乳姉妹』の内容を取り入れたものである。『谷間の姫百合』や『乳姉妹』の存在は『ドラ・ソーン』が中国で受容される際に、重要な架け橋の役割を果たしていたのである。

キーワード:

『ドラ・ソーン』、『谷間の姫百合』、『乳姉妹』、メディア・ミックス、受容

# 東アジアにおける『ドラ・ゾーン』の翻訳と翻案 -小説の翻訳を中心に-

鄒 波  
復旦大学外文学院

## 1. はじめに

### 1.1 メロドラマと近代東アジア

明治維新以降、日本は急速に近代化の軌道に乗り、様々な面で西洋の影響を受けていた。国家制度、学制、軍事などの面で近代化、あるいは西洋化が進んできたため、近代市民社会は徐々に成立した。文学においては、坪内逍遙が『小説神髓』では近代の写実主義を提唱し、1887年に近代小説『浮雲』は誕生したが、一般庶民にとって、江戸時代からの読書や観劇などの習慣もあって、リアリズムの文学より尾崎紅葉の『金色夜叉』、徳富蘆花の『不如帰』などの文学の方が親しみやすかったのである。『金色夜叉』や『不如帰』などの作品が読者を魅了する力は新しい家庭、新しい感情の登場にあったと考えられる。1890年に明治政府は教育勅語を發布し、儒学的な道徳倫理を教育に導入する姿勢を示した。この頃から新聞小説で多くの家庭小説が連載され、新派劇や映画に豊富な素材を提供するようになった。

こうした文学についての研究も、現在推し進められている。例えば堀啓子の研究で明らかになったのは、尾崎紅葉の名作『金色夜叉』の種本はバーザ・M・クレーの『女より弱き者 (Weaker Than a Woman)』ということである。また「そこからはあくまで〈材料〉を拾ったのであり、『金色夜叉』の大半は尾崎紅葉のオリジナルだ」<sup>1</sup>という指摘も看過してはならない。『金色夜叉』の種本の作家として日本でも一躍人気になった作家バーザ・M・クレー (Bertha M. Clay) の本名はシャーロット・メアリー・ブレン (Charlotte Mary Braeme) であり、1869年以降、イギリスで連載小説を発表し、人気を博した。後にアメリカでも歓迎され、バーザ・M・クレーが得意としたメロドラマは、数多く出版された。「杜撰な出版管理により、海賊版も多く、その全作品は1500に及ぶと言われている。」<sup>2</sup>という指摘もあるほどだ。明治期の作家に欧米のメロドラマを愛読し、それを翻訳したり、翻案したりした人は少なくない。バーザ・M・クレーの作品が日本で受容された例も多くある。尾崎紅葉の『不言不語』の種本はバーザ・M・クレーのミステリであり、黒岩涙香の『己の罪』、『野の花』、『乳姉妹』はバーザ・M・クレーの作品をもとにしたものである。

<sup>1</sup> 堀啓子 (2002) 「訳者あとがき」バーザ・M・クレー『女より弱き者』南雲堂フェニックス, 502

<sup>2</sup> 堀啓子 (2002) 「著者紹介」バーザ・M・クレー『女より弱き者』南雲堂フェニックス

本研究ではバーザ・M・クレーの『ドラ・ソーン』の東アジアでの受容を研究テーマにして考察してみたい。『ドラ・ソーン』が日本で翻訳され、翻案された経緯についてすでに研究されてきたが、この作品がいかに日本を経由して中国で様々な形で受容されているのかはまだ十分に検討されていない。それで本稿で先行研究<sup>3</sup>によって指摘された情報を再検討し、小説の翻訳を中心に『ドラ・ソーン』の中国での受容を実証し、関連情報を分析することにしたい。

## 1.2 『ドラ・ソーン』について

『ドラ・ソーン』はバーザ・M・クレーの代表作であり、1883年に出版されたものである。作品の内容をまとめて見ると、次のような構造と展開が分かる。

表一 『ドラ・ソーン』の梗概

1.出会	ロナルド (Ronald) はイギリスのアール伯爵 (Lord Earle) の息子である。伯爵の山小屋の番人の娘ドラ・ソーンと出会い、恋に落ちる。
2.結婚	ロナルドは親の反対を無視し、ドラ・ソーンと結婚する。
3.家出	親と縁を切ったロナルドはドラ・ソーンとイタリアで暮らし、二人の娘をもうけた。
4.誤解	ドラ・ソーンは夫と貴族の娘ヴァレンタイン (Valentine) との仲を疑い、娘たちを連れて実家に戻る。
5.姉妹	姉のベアトリス (Beatrice) は自由奔放な性格であり、妹のリリー (Lily) は物静かな娘である。
6.婚約	ベアトリスは船乗りのヒュー (Hugh) と恋をし、密かに婚約した。
7.再会	アール伯爵が亡くなった後、ロナルドは家を継ぎ、二人の娘を引き取る。
8.婚約	ベアトリスはヒューとの婚約を隠し、貴族のアーリー伯爵と婚約した。リリーも親戚のライオネル (Lionel) と恋愛関係になる。
9.死亡	ヒューが突然訪れ、ベアトリスとの婚約の履行を求めた。ベアトリスは誤って池に落ち、溺死した。
10.団欒	ヒューはロナルドに真相を告げる手紙を残して死ぬ。ロナルドとドラ・ソーンは復縁し、リリーとライオネルも結婚した。

作品の梗概を見ると、『ドラ・ソーン』はイギリス貴族社会を背景にした作品であり、恋愛と陰謀をテーマにしており、家庭小説と探偵小説の要素を取り入れた作品であるといえる。

<sup>3</sup> 直接本論文に関係する研究成果として、以下の著書と論文がある。

飯塚容 (2014) 『中国の「新劇」と日本』中央大学出版部

潘少瑜 (2012) 「維多利亞《紅樓夢》：晚清翻譯小説《紅淚影》的文學系譜與文化譯寫」『臺大中文學報』39号

### 1.3 日本における『ドラ・ソーン』の受容

#### 1.3.1 『谷間の姫百合』

『ドラ・ソーン』の最初の日本語訳は末松謙澄（1855-1920）が訳した『谷間の姫百合』である。謙澄は伊藤博文の婿であり、逓信大臣、内務大臣を務めた政治家であった。彼は 1878 年から 1886 年までのイギリスに留学中に人気だった『ドラ・ソーン』に出会い、帰国してから翻訳に取り掛かった。『谷間の姫百合』は 1888 年から 1890 年にかけて金港堂より刊行された。「詳しい異同は別として、原作の趣意は概ね変えられてはいない。各章の区切りも厳正に原作と一致させている」<sup>4</sup>と評価されている。

『谷間の姫百合』を『ドラ・ソーン』と比較して読めば、最も顕著な相違点が、登場人物の名前が日本風に変更された点である。

表二 『ドラ・ソーン』と『谷間の姫百合』の登場人物

『ドラ・ソーン』	『谷間の姫百合』
ロナルド	有洲成人
ドラ・ソーン	虎
ヴァレンタイン	春枝
ベアトリス	緑
リリー	瑠璃
ヒュー	樋口半蔵
アーリー	入江伯
ライオネル	手繰亮三

謙澄は再版の「凡例」で次のように説明している。「編中の地名人名は原語の儘にては通読の際何となく感情の移らざる所あるが為め江湖の異論あるべきをも顧みず多くは原語の音に近きか又は其の一部分の音に当たるか又はその意に当たるものを和名となして用いたり但し重要な地名及び歴史に属する人名は仍原名を用いたり。」<sup>5</sup>読者の共感、共鳴を考慮した上での固有名詞の書き替えであった。これは明治期の翻訳小説によく見られる翻訳のストラテジーである。

<sup>4</sup> 堀啓子（2000）『『谷間の姫百合』試論——Bertha M. Clay を藍本として』『北里大学一般教育紀要』5号，112

<sup>5</sup> 末松謙澄（1889）『谷間の姫百合』青木嵩山堂

### 1.3.2 菊池幽芳『乳姉妹』

菊池幽芳（1870-1947）訳『乳姉妹』は1903年8月24日から12月26日まで『大阪毎日新聞』に連載された。前作の『己の罪』と並んで大いに読者の支持を得た。「この小説は単行本として出版された当時の序文にも断って置いた通りベルサ・クレイ女史の或る作品から端緒を得たものである」<sup>6</sup>と菊池幽芳自身が述べているが、作品名は明かされていない。まず作品のあらすじを確認してみよう。

表三 『乳姉妹』の梗概

1.囑託	東京の豪商真野順蔵の娘君江は幼い娘君子を乳母のお浜に預けた。
2.難破	君江は台湾の病院に入院している海軍大尉の夫昭定を見舞いに行く。途中海難に遭い、死亡した。
3.姉妹	お浜には君江という娘がいる。彼女は君子に房江という名前をつけて育てる。
4.婚約	君江は冒険家の高浜勇と知り合い、婚約をした。
5.秘密	お浜が病死した際、房江の出生の秘密を君江に言い残した。
6.後継	昭定は東京侯爵松平家の後継となる。昭定は昭信を養子に取り、娘君子の行方を探す。
7.偽り	君江は君子と名乗り、松平家に入る。昭信と婚約した。
8.殺害	高浜勇は君江に婚約の履行を要求し、もめる間に刃物で君江を殺した。
9.真相	高浜勇は昭信に真相をつげ、警察に連れて行かされた。
10.団欒	房江は松平家に迎えられ、後に昭信と結婚した。

原作の『ドラ・ソーン』と比較して読めば分かるように、原作の前半に当たる部分、貴族のロナルドと番人の娘ドラ・ソーンとの出会い、恋愛、結婚は大幅に削られている。ロナルドとドラ・ソーンの話は最初の「囑託」の章で真野君江の口を借りて語られるだけである。「囑託」と「難破」の部分はほぼ創作であり、双子の娘の設定は乳母の娘と貴族の実子というふうに変更され、2人の娘の恋愛物に裏切りと復讐を加味した設定は原作そのままである。君江が貴族の実子を騙す部分は原作になく、創作されたと思われる。「もしかすると幽芳は別の種本をもう一つ混在させている」<sup>7</sup>という可能性もあり、詳しい検証が必要かもしれない。

## 2. 『ドラ・ソーン』の中国語訳

### 2.1 『一東縁』

近代中国において、数多くの外国文学が中国に紹介された。『ドラ・ソーン』は20世紀の初頭から複数の翻訳が出版され、広く読まれたメロドラマの1つである。

<sup>6</sup> 菊池幽芳（1925）『幽芳全集 第2巻』国民図書株式会社，4

<sup>7</sup> 飯塚容（2014）『中国の「新劇」と日本』中央大学出版部，153

東アジアにおける『ドラ・ゾーン』の翻訳と翻案  
-小説の翻訳を中心に-

今まで先行研究で判明した『ドラ・ゾーン』の中国語訳は2つあり、最初に翻訳、出版されたのは『一束縁』である。論者が寓目したのは、1912年12年に出版された商務印書館の再版である。それは1冊、全20回という構成である。表紙に「説部叢書 初集第29編 道徳小説」と書いてあり、著作権ページに「丙午年二月初版 原著者 英国李来姆 訳述者 商務印書館編訳所」と記されているところから判断すると、初版は1906年2月に出版、原作者はイギリスの作家ブレムである。序文からは他の情報も読み取れる。

乃取英人所著之伯爵之女一書，口譯而囑老鈍演其義。病其名晦，易之曰一束縁。籍此戒婦女貪憎妒嫉之心。則庶幾乎講求家庭教育，母儀婦德，群焉日臻。他日奪社會欺詐之機械，樹以正直之旗幟，駸駸乎一國道徳之風，從小説發端，即從一束縁濫觴矣。<sup>8</sup>

[蘭言主人は] イギリス人が書いた『伯爵の娘』という本を選び、口語で訳して余にその意義を説明させた。原題がわかりにくいところに欠点があると思われたので、『一束縁』に改題した。この書は婦人の貪欲と憎しみ、そして嫉妬心の戒めとなる。すなわち、この書によってはじめて、家庭教育、母としての義務、そして婦徳を追求することが出来るようになるのである。他日社会に横行する詐欺をもたらし機構を一掃することにもなろう。正直の御旗を立て、めまぐるしく進展していく一国の風紀は、小説に端を發するものなのである。すなわち『一束縁』こそが、その濫觴なのである。

( [ ] 内は引用者に拠る)

序文は「江東老鈍」という人物が書いたものであり、日付は甲辰(1904年)12月24日である。調べてみたが、「江東老鈍」という筆名を使った作者、翻訳者は見当たらなかった。彼の序文によると、蘭言主人という人が原作を選択し、口語で訳した。江東老鈍は蘭言主人の訳に基づいて自分なりに翻案したと述べている。もしそれが事実であれば、この作品は二人の共同作業によって完成した訳本になる。「訳述者 商務印書館編訳所」という記述は翻訳者の名を明記しない策略の一つと考えればよい。実は「商務印書館編訳所」と記されている「説部叢書」は複数あったのである。

<sup>8</sup> 商務印書館編譯所(1903)『一束縁』商務印書館

『一朶縁』の訳本に関しては、不明なところが多い。まず、翻訳の種本が明らかにされていない。「イギリス人が書いた『伯爵の娘』」と書いてあるが、『伯爵の娘』は原作の題名よりも内容を指しているようである。飯塚容は「その内容は『ドラ・ソーン』や『谷間の姫百合』よりも『乳姉妹』に酷似している。」<sup>9</sup>と結論づけている。つまり、『一朶縁』は英語の原作『ドラ・ソーン』を翻訳したものというよりも、菊池幽芳の『乳姉妹』から翻案された可能性が高いということになる。

表四 『ドラ・ソーン』と訳本に出ている登場人物の名前

『ドラ・ソーン』	『乳姉妹』	『一朶縁』	『紅涙影』
	真野順蔵	史戴芬	安浩伯
Dora Thorne	真野君江	麦加来	阿礼斯
Ronald	昭定	亜脱	依歴
	乳母のお浜	江素珊	戴蘭西
Beatrice	君江	列徳	阿連
Lily	房江	黛茜	美儂
Hugh	高浜勇	頼虚登	
Lionel	昭信	李飛力	

登場人物の比較で分かるように、『一朶縁』に出ている名前は『ドラ・ソーン』や『乳姉妹』と異なっており、「黛茜 (Daisy)」のような西洋人らしい名前もあれば、「江素珊」のような完全に中国人のような名前もある。『ドラ・ソーン』の日本語訳では登場人物の名前は全部日本人のものに変更され、『一朶縁』ではほとんど西洋人のように設定しているが、『ドラ・ソーン』とは一致していない。「訳述」という翻訳のストラテジーは翻案の自由を得て、翻訳者の主体性を発揮する訳し方である。登場人物の名前の扱い方から見れば、翻訳者がイギリスの原作から翻訳したことを強調しようとしていたことは、日本語訳とは違って、登場人物に欧米風の名前を採用したことからもうかがえる。

作品の第一回「投村託蔭 (村に赴き子を預ける)」の内容を見ると、書き出しの部分には架空のイギリスの地名などが書き加えられ、まったく新しいプロローグとなっている。

<sup>9</sup> 飯塚容 (2014) 『中国の「新劇」と日本』中央大学出版部, 157

東アジアにおける『ドラ・ゾーン』の翻訳と翻案  
-小説の翻訳を中心に-

英國噓望省，有一個村莊，名叫蝶彈兒。四面都是叢樹圍繞，稻田草地，遠近參錯，當中有一道河，從那佛拉司江的分派到此，合流經過，這村邊隱隱約約的一抹青山，斜插海中。（中略）有一天，將近黃昏，來了一輛破敗馬車，中間坐著一個少婦。懷裏抱著一個嬰孩。馬夫停了車，便問江夫人的住處。（『一束縁』pp.1-2 下線は論者による。以下同）

ある夏の午後五時過、播州飾磨の里に導びく田舎道を、二人乗の俵に揺られて来る品のよい若い夫人がありました。年のころはやっと二十二三位、高等な丸髷に藤色の手柄をかけ、越後上布の紺飛白を着ているのが、その白い肌に移り合って、際立って器量をよく見せています。（菊池幽芳『乳姉妹』前編 p.1）

比較して読めば分かるように、所々「伊太利」のようなヨーロッパの地名などが出てくるものの、作品の舞台は日本に移し変えられ、登場人物の名前は君江と房江となり、服飾も和服に書き換えられた。それに対して『一束縁』の内容と筋、及び展開は『乳姉妹』とほとんど同じではあるが、舞台は原作と同じくイギリスとなっている。

描写と会話に着目してみると、『一束縁』の方は比較的簡略であり、細かい部分の改作は多くある。代表的なのはヒロインの列徳が頼虚登に拳銃で殺された描写である。菊池幽芳の作品では拳銃ではなく、刃物で殺害されていた。また、『一束縁』の末尾は書き換えられ、『乳姉妹』とは違うものになっている。

内有一個孩子問道，今天我們道後面放木器道舊房子裏，看見一張油畫。畫的女像好看得很，不曉得是什麼人。黛茜聽了，臉色慘然。李飛力嘆了一口氣道，這個人麼，不幸她短命死了。就回答他這一句，這一束縁的書就此收煞了。

（『一束縁』 p.115）

一ヶ年の後に昭信と房江とが、最も温かに最も美しい家庭を形作るに至った、その間の経路については、更にまた一篇の物語をなすべきほどに記すべき事が沢山ありますけれども、私はここに蛇足を添える事を避けて、まずはこのお話の終局を告ぐることにいたします。（菊池幽芳『乳姉妹』後編 p.262）

『乳姉妹』の終章に君江が高浜勇に殺害されたことが新聞に取り上げられた一節と、君江を恋していた綾小路大尉が墓参りした一節がある。『一束縁』では削除され、代わりに十何年後のことを書き加えられた。

『一束縁』の題名について補足しておきたい。一束縁は中国語で「一通の手紙の縁」という意味になり、ヒロインの黛茜の出生の秘密が手紙に書かれ、聖書に挟まれていたが、後に列徳が聖書を恋の証として頼虚登に渡し、自分の不正が証明される決定的な証拠となった。中国語訳『一束縁』はこの手紙が小説の展開にとって重要な役割を果たしていることをふまえて題名にしたと考えられる。

## 2.2 『紅涙影』

『ドラ・ソーン』のもう一つの中国語訳は『紅涙影』であり、1909年に上海広智書局により出版された。1909年7月10日の『申報』に「言情小説紅涙影四卷」の広告が載せられた。広智書局は香港の出版商人馮鏡如が1901年に創立した出版社であり、梁啓超などの維新派の本を多く出版した。1915年に休業するまで、410種の書物を出版し、翻訳小説は58種ある。論者が入手したのは広智書局版ではなく、1924年11月に世界書局によって出版された第四版であり、第五版まで版を重ねたという。1923年8月23日『申報』の広告に、世界書局の新刊として『紅涙影』が掲げられている。経営難のため『紅涙影』の著作権などは世界書局に転売された証明ともなるだろう。

世界書局版『紅涙影』は4冊で、全24回の構成である。著作権ページに「著作者 英国巴達克礼 訳述者 息影盧主」と記載されている。「巴達克礼 (Ba da ke li)」は Bertha M. Clay の音訳である。翻訳者「息影盧主」の本名は陳雪君、字梅卿であり、広東附城の出身である。陳梅卿は青年期に欧米、そして日本に留学し、李鴻章の通訳を勤めたこともある。陳梅卿の生年は不詳で、1913年1月に肝臓病で亡くなった。彼の生涯については、『申報』に掲載された門下生や友人たちの追悼文などで断片的に語られているだけだ。その中に「生涯の著作はすこぶる多い。ことに恋愛物や稗史類を好んでいる。翻訳に『紅涙影』は自信作である」<sup>10</sup>という批評があった。『紅涙影』には嶺南披髮生 (1876-1949) の書いた序文がある。嶺南披髮生の本名は羅普で、字は熙明、号は孝高である。康有為の弟子であり、梁啓超と『十五小豪傑』 (横浜新民社 1903年) を共訳し、黒岩涙香の『鉄仮面』、『離魂病』などを訳した人物でもある。序文のほかに、羅普は作品の評論も書き記していた。小説の構造や表現、登場人物の性格などを簡潔な言葉で評している。

『紅涙影』の第1章の内容はこう次のようなものである。イギリスの名門出身の安克信には子息がなく、甥の安浩伯に継いでもらおうと考えている。安浩伯は学校を設立し、教師を雇った。そこで偶然で老教師の娘である阿礼斯と知り合い、恋に落ちた。『ドラ・ソーン』の第1章はプロローグであり、アール卿が息子の恋愛に反対し、二人が言い争っている場面である。『紅涙影』の第1章の冒頭を、対応する『ドラ・ソーン』の第2章と比較して読んでみよう。

---

<sup>10</sup> 『申報』1913年1月30日第10版

原文：生平著作頗多尤好艷情野史譯紅涙影一書是其得意之作也

東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻訳と翻案  
-小説の翻訳を中心に-

話説英國尼華士里府，昔日有一蕃侯，姓安官名克信，乃英國名門世胄，累代簪纓，祖上曾征平蘇格蘭土寇，克復了多少城池。論起安家的汗馬勳勞，真是功在國家，名輝青史，傳至第三代嫡孫克信，雖然門庭赫奕，家有良田萬頃，俸祿千鍾，可惜美中不足，偏遇一脈單傳，人丁微薄。

アールズコート の領主、アール家は、イギリスで最も古くから続く家柄のひとつだった。「アール男爵」の名は、古くチューダー朝の初期の記録にも見受けられる。彼らは決して政治の舞台や戦場に華々しく登場することはなかった。この一族の年代記には、ただ飾り気のない、徳の高い彼らの生活ぶりがかがえる。そしてそこにはまた、いくつかのロマンチックなできごととも記されていた。初期の幾人かは勇敢な兵士たちだった。ぎりぎりまで戦い、間一髪で逃げたという功績が、陸海両方で認められた。(後略)<sup>11</sup>

『紅涙影』では、イギリスの貴族という設定はそのまま用いられているが、細かい部分は書き直されている。翻訳者の陳梅卿は西洋事情に詳しかったと考えられる。「外国の風物を上手く描き、読者に外国にいるように感じさせ、主人公たちを自分の目で見ているように感じさせる」<sup>12</sup>と披髮生は評している。

『ドラ・ソーン』では、ドラは双子の娘を産んだ。「小さな双子の娘たちは、心身ともに美しく成長していった。だが、二人はまったく違っていた。ベアトリスはより美しく輝いていた。リリアンはより可愛く、愛らしかった。ベアトリスには情熱と活気があった。妹は優しく穏やかだった。ベアトリスには大いなる欠点と美徳があった。リリアンはただ善良で愛嬌があった。それでもベアトリスのほうがより愛された。誰にも、彼女の望みを拒むことはできなかった。」<sup>13</sup>『紅涙影』に登場している美儂はリリアンに当たり、阿連はベアトリスに当たるが、美儂は貴族安浩伯と阿礼斯の娘であり、阿連は戴蘭西の娘である。

『紅涙影』の第一冊と第二冊の前半では安浩伯と阿礼斯の恋愛、出産、離別、阿礼斯の死が描かれ、ここまでは『ドラ・ソーン』の前半とほぼ重なっているが、安浩伯が娘を戴蘭西に預けるところから、戴蘭西は欲に眼が眩み、自分の娘を安浩伯の娘と

<sup>11</sup> 堀啓子 (2011) 「Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その1)」『東海大学紀要文学部』95号, 75

<sup>12</sup> 披髮生 (1912) 「紅涙影序」『紅涙影』世界書局, 3  
原文: 尤妙在善寫外邦風物, 令觀之者儼如神遊其域, 目睹其人。

<sup>13</sup> 堀啓子 (2016) 「Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』(翻訳・その11)」『東海大学紀要文学部』105号, 5

偽り、安家の後継者である依歴に娘を結婚させようとする。この部分は『ドラ・ソーン』にない設定であり、菊池幽芳の『乳姉妹』、または『一束縁』と似ている。第三冊からは美儂、阿連と依歴3人の恋愛物になり、ベアトリスと船乗りのヒューとの婚約、ヒューの復讐などは削除された。付け加えられたのは美儂が病気になり、阿連が毒殺を企んで発覚された部分である。この部分は近代中国で話題を呼んだ翻訳小説『空谷蘭』<sup>14</sup>の設定と似ている。つまり、『紅涙影』の後半は書き直されたものと見てもよい。前半にある貴族の後継者が身分の低い女性と恋愛し、親に隠れて結婚し、そして出産するというプロットから見れば、原作『ドラ・ソーン』の設定を用いているが、後半は陳梅卿の創作なのである。また、双子の設定を変更し、娘をすり替える設定は『乳姉妹』や『一束縁』からヒントを受けたと思われる。『紅涙影』は翻訳というよりリライトされた作品である。イギリスの貴族社会を背景として使って創作された翻案小説と判断しても妥当だと思う。翻訳基準に適しているかどうかは別の問題であるが、『紅涙影』は家庭小説の要素を持ち、自由恋愛、三角関係、欲望、陰謀などメロドラマが必要とする要素を十分に兼ね備えた作品だったと考えられる。

文化的視座から見れば、『紅涙影』は重要な原点となっていた。1910年代後半から新劇『紅涙影』が上演され続け、1931年と1941年に2回映画化もされ、さらに海南島の地方劇として現在に至るまで享受され続けている。受容の経緯はこの作品に込められた、読者の共鳴を呼び起こす生命力を証明しよう。

## 2.3 稀観本『乳姉妹』

『ドラ・ソーン』の中国語訳を考察する際、論者は偶然で稀観本『乳姉妹』を発見した。この訳本は1916年に中国図書公司により出版されたものであり、翻訳小説の書誌や目録に記載されていない。潘少瑜は論文<sup>15</sup>の中でこの訳本に言及しているが、詳細な情報は触れていない。作品の著作権ページには「著者 菊池幽芳」と明記されている。翻訳者は「韻琴女士」であり、二冊で、全18回ある。

翻訳者の韻琴女士こと劉韻琴（1883-1945）は江蘇省興化の出身であり、1912年から1915年まで日本中央大学に留学した。帰国後、上海の『中国新報』に就職し、中国で初の女流記者となった。劉韻琴は英語も堪能であり、畢倚虹とアメリカの小説

<sup>14</sup> 原作はバーザ・M・クレイ作 *A Woman's Error* であり、包天笑が黒岩涙香の『野の花』から重訳し、1908年に有正書局によって出版された。後に新劇の舞台に上り、映画化された。中国での受容は『ドラ・ソーン』と非常に似ている。楊文瑜、鄒波（2015）『『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述に関する考察』『東アジア日本語教育・日本文化研究』（第19輯）にされたい。

<sup>15</sup> 潘少瑜は「劉韻琴（1884-1945）の『乳姉妹』（1916）は菊池幽芳の『乳姉妹』の中国語訳である」と述べている。潘少瑜（2012）『維多利亞《紅樓夢》：晚清翻譯小説《紅涙影》的文學系譜與文化譯寫』『臺大中文學報』39号，260

東アジアにおける『ドラ・ゾーン』の翻訳と翻案  
-小説の翻訳を中心に-

『ニューヨークの夫人』を共訳したこともある。しかも、口語体の小説を創作した小説家でもあった。

この訳本には「訳述」と記されているが、比較的菊池幽芳の原作に忠実である。

ある夏の午後五時過、播州飾磨の里に導びく田舎道を、二人乗の俵に揺られて来る品のよい若い夫人がありました。年のころはやっと二十二三位、高等な丸髷に藤色の手柄をかけ、越後上布の紺飛白を着ているのが、その白い肌に移り合って、際立って器量をよく見せています。(菊池幽芳『乳姉妹』前編 p.1)

一日薄暮的時候、播州飾磨里田舎道中、忽來了一乗可坐二人之人力車。車中載着一年約二十二三歲的少婦。那少婦容儀靜婉，衣飾麗都。(劉韻琴『乳姉妹』上冊 p.1)

書き出しの部分と比較すると分かるように、地名などの名詞は原作と同じであり、描写の細部が多少簡略化されてはいるものの、訳文全体は忠実で、表現も流暢である。1915年に陳独秀が『青年雑誌』（後に『新青年』に改名）を創刊し、科学と民主を提唱した。1918年1月に出版された第4巻第1号では「白話文」の新文体と新式の句読点が用いられた。言文一致の新文化運動の前夜に誕生したにもかかわらず、劉韻琴訳『乳姉妹』は滑らかな口語体で書かれ、完成度の高い新文体をなしている。

(侯) そんな心配はいらぬぞ。聞収めじゃ。そちの琴は君江の手と同じじゃから、君江に逢う前に一つ……喃、頼みじゃ。

侯爵がここで君江と云われたは、いうまでもなく亡夫人を指したのでしょう。最後の頼とも見られますので、此上に房江は争う力はありませんから、漸やく病室の中へ琴を取寄せたのでありました。房江は調子を試みながら、

(房) 何をいたしまししょうね。

(侯) 『残月』……『残月』を……。

(房) は、はい……(とこの時房江の眼には涙が浮かびましたのを侯爵にみられじと俯いて) それじゃあ『残月』をいたします。

房江は心に泣きながら、今死ぬ人を前に置き、いつもの冴えた手に奏で始めたのでありましたが、まず前弾があつてから、中音に哀れを帯びて美わしく、謡い始めました『残月』の調。

『磯辺の松に葉がくれて（合の手）沖の方へと入る月の、光や夢の世をはやう（合の手）さめて真如のあきらけき、月の都に住むやらん。（手事）』（菊池幽芳『乳姉妹』後編 pp.22-23）

侯爵道，我於今聽了，絕不會傷感的。因你的琴，與我那君江的一般，我想於未曾會他之前，聽聽去。你不必過慮，快著人去拿琴來。房江無奈，祇得出來叫侍女取了來。試好了，問道，彈什麼。侯爵舉眼望著窗格道，就彈殘月罷。房江聽了，想起方才看月時情形，禁不住俯著頭淚如雨下。恐怕侯爵看見，側面背燈坐著，彈道。顧彼松影，何亦迷離，影亦迷離。月在西陲，在西陲兮不可追。月之光兮一夢如，月之宮兮寒離居。（劉韻琴『乳姉妹』下冊 pp.8-9）

引用文を比較して読めば明らかであるが、劉韻琴の翻訳は逐語訳ではなく、原作の情報を十分に汲み入れ、調整しながら訳したものである。しかも、劉韻琴訳からは文学的な素養が豊かに感じられる。『残月』の歌は楚辞の形を取っており、古雅に満ちた文体である。地の文は『紅樓夢』などの古典小説を想起させるほど柔軟で端正な表現で綴られている。

### 3. おわりに

本論文では主に小説の翻訳を中心に『ドラ・ソーン』の東アジアでの受容を考察した。1889年に『谷間の姫百合』が誕生したことをきっかけに、『ドラ・ソーン』は近代東アジアで長い旅を始め、テキストは換骨奪胎され、強い生命力を付与されたのである。『ドラ・ソーン』に基づいて大幅に翻案された『乳姉妹』は家庭小説の典型を作り、大きな反響を呼んだ。『乳姉妹』の成功に影響され、作品は様々な形で読者や観客に親しまれていた。

中国における小説の翻訳を考察すると、三つの訳本が『ドラ・ソーン』の日本語訳『乳姉妹』と関わっていることが明らかになった。『一束縁』は『乳姉妹』からの翻案作であり、韻琴女士の『乳姉妹』は菊池幽芳の作品を忠実に訳した作品である。さらに『ドラ・ソーン』をリライトした『紅涙影』は『乳姉妹』の内容を取り入れていた。『谷間の姫百合』や『乳姉妹』の存在は『ドラ・ソーン』が中国で受容されるに際して、重要な架け橋の役割を果たしていたのである。

日本を経由して中国で翻訳、改作され、受容された『ドラ・ソーン』は近代世界文学の流通を証明するサンプルであり、比較文学のよい例でもある。中国で『ドラ・ソーン』の受容が小説の翻訳から始まり、新劇の上演と映画化を経て中国の地方劇に定着した経緯は別稿で考察することにしたい。また、家庭小説というジャンルで多くの読者、観客の共感を呼び起こした原因についても、紙幅の都合で、本稿では論じることが出来ない。稿を改めて、詳細に扱うことにしたいと考えている。

東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻訳と翻案  
-小説の翻訳を中心に-

参考文献

- 末松謙澄（1889）『谷間の姫百合』青木嵩山堂
- 菊池幽芳（1904）『乳姉妹』春陽堂
- 菊池幽芳（1925）『幽芳全集 第2巻』国民図書株式会社
- 商務印書館編譯所（1903）『一束縁』商務印書館
- 息影盧主（1912）『紅涙影』世界書局
- 韻琴女士（1916）『乳姉妹』上海中国図書書公司  
『申報』1913年
- 関肇（2008）「反転するメロドラマー菊池幽芳『乳姉妹』を読む」『日本文学』57巻7号, 78-84
- 関肇（2010）「『商品としての『乳姉妹』』『国語国文』79巻1号, 1-19
- 鬼頭七美（2013）「〈家庭小説〉ジャンルの形成—菊池幽芳『乳姉妹』とその周辺—」『国文目白』52号, 54-61
- 堀啓子（2000）「『谷間の姫百合』試論——Bertha M. Clay を藍本として」『北里大学一般教育紀要』5号, 117-106
- 堀啓子（2002）『女より弱き者』南雲堂フェニックス
- 堀啓子（2006）「翻案としての戦略：菊池幽芳の『乳姉妹』をめぐって」『東海大学紀要. 文学部』86号, 57-67
- 堀啓子（2007）「明治期の翻訳・翻案における米国廉価版小説の影響」『出版研究』38号, 27-44
- 堀啓子（2011）「Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』（翻訳・その1）」『東海大学紀要. 文学部』95号, 120-110
- 堀啓子（2011）「Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』（翻訳・その11）」『東海大学紀要. 文学部』105号, 200-194
- 潘少瑜（2012）「維多利亞《紅樓夢》：晚清翻譯小説《紅涙影》的文學系譜與文化譯寫」『臺大中文學報』39号, 247-294
- 飯塚容（2014）『中国の「新劇」と日本』中央大学出版部
- 楊文瑜（2015）『文本的旅行——日本近代小説《不如歸》在中國』華東理工大学出版社
- 楊文瑜、鄒波（2015）「『野の花』の種本と黒岩涙香の訳述に関する考察」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第19輯, 175-196